

■ 米消費拡大・インフレ期待上昇でドル強含みに変わりなし！

目下の市場の関心と話題は、専ら日経平均株価の3万円台回復と米金利の一段の上昇に集中していると言えよう。まずは、とにかく米・日株価の上げの勢いが強い。NYダウ平均は昨日も前日(16日)に引き続いて史上最高値を更新し、ナスダック総合指数も16日に取引時間中の最高値を更新している。一方の東京市場では、日経平均株価が「30年半ぶりに3万円台を回復(15日)」との感慨に浸るのが早いか、翌16日には3万0700円台まであつと言う間に駆け上がるという一幕もあった。

米国株については、やはりコロナの新規感染者数が急激な減少傾向を辿っている点が何より大きい。先週12日から、ニューヨーク市で約2カ月ぶりに店内飲食が再開されるなど、ワクチン効果によって徐々に日常が取り戻せるようになるとの期待も盛り上がっている。

日本株については、やはり米株高の貢献度が高いと思われるが、もちろんワクチンの接種が遅ればせながらスタートしたという事実も重い。海外投資家にとってみれば「今こそ日本株の一斉買い！」を正当化するための格好の口実になったものと思われる。

ここにきて海外ファンド筋などは、その資金力にモノを言わせてファーストリテイリングの株価を10万円超にまで押し上げた。彼らは、寄与度が高い同社株を買い上げることで日経平均株価を買うことの代替としている。結果、1単元の株式を手に入れるのに1000万円超の資金を要する事態となった。これぞ、まさに「いつか来た道」でありバブルの象徴以外の何物でもない。

筆者は1988年に証券界に身を投じ、同年末に日経平均株価が3万円台に乗せた日のことを良く覚えている。また、それから1年が経過するなかで更に9000円近くもの上昇となったことは、もっと良く覚えている。あのバブルを嫌というほど体感している筆者は、コロナ以前からバブルの到来を確実視してきたが、コロナ禍はそのスケールを一層拡大させた。

足下では、まだまだワクチン効果期待が盛り上がり続けている。加えて、米国では昨年12月に実施した経済対策の効果と、3月には成立すると見られる1.9兆ドル規模の追加対策案への期待が渦巻く。昨日発表された1月の米小売売上高が事前の想定を大きく上回る高い伸びとなったのは、やはり昨年末に600ドルの直接給付が実施されたことも大きな要因の一つであろう。まして、次は所得制限付きの見通しとはいえ1400ドルの給付である。

米個人消費の盛り上がりは当然、消費者物価指数(CPI)の上昇に結び付く。昨日発表された1月の米卸売物価指数も事前予想を大きく上回る結果で、足下のインフレ期待は一層高まること間違いなし。結果、昨日は米10年債利回りが一時1.33%台、米30年債利回りは2.1%台まで大きく上昇する場面を垣間見ている。2-10年債の利回り格差もスティーピングの状況を続けており、先々の景気拡大期待は見る見る強まっている。

当然、足下ではドル高傾向が強まっており、前回更新分の本欄で想定したとおり、ドル/円は16日に再び200日移動平均線を試し、クリアに同線を上げた。そして、ほどなく昨年3月のコロナショック後の高値から直近安値までの下げに対する38.2%戻し=106.07円を試した後、さらに106.22円まで上値を試す動きとなっている。

38.2%戻し達成後に今年1月初旬から形成している上昇チャネルの上辺まで到達したことで、目先は上げ一服となるのも道理。チャネル下辺まで一旦下押ししても105.00円処をクリアに下抜ける可能性は低いと見られ、調整一巡後に再び上げ基調を強めて直近高値を上げれば、次は昨年8月に幾度か試した107.00円処が意識されやすくなると見る。つまり、基本的には押し目買いのスタンスで臨みたい。

一方、ユーロ/ドルについても前回想定した通りで、足下は一目均衡表の日足「雲」下限を再び意識した動きとなっている。今度こそ日足「雲」下限を下抜けるかどうか、ということが最大の焦点であり、下抜ければ次に昨年11月安値から今年1月高値までの上げに対する61.8%押し=1.1888ドルあたりを試す動きになると思われる。(02月18日 10:10)